

あらためて「哲学 事始め」

早稲田大学法学部非常勤講師
公益財団法人日独文化研究所研究員
関口 浩

本日は“哲学事始め”ということでお話をします。哲学の研究をしていると、「難しい学問をなさっていますね」とよく言われます。哲学は難しいものという常識があるようですが、私の話を聞いて、そうでもないと思っていただければ幸いです。

✚ 哲学はすべての学問のもと

哲学というのはどんな学問かということからお話します。学問を紹介するときに、まずその研究領域が紹介されます。経済学だと物品の売買や会社の事業活動といった人々の経済活動、法学であれば人間社会のルールとしての法律です。生物学の研究領域は様々な生物で、その中で動物を研究するのは動物学、植物を研究するのは植物学です。

では哲学の研究領域は“哲”でしょうか。そうではありません。例に挙げた学問のように、研究領域が限定されないのです。“哲”は“ソフィア”の訳で知恵という意味です。どんな学問も知恵を求めますが、すべての学問のもとになるのが哲学なのです。

✚ プラトンのアカデメイア～限定されることなく自由にものを考える

2500年ほど前、哲学は、古代ギリシアで始まりました。ギリシア人は自由を求める人々で、知的活動にも自由を求めました。どんな文明にも専門学校があり、例えば調理師学校では上手に料理して繁盛するレストラン経営をすることを教えます。そういう調理師学校で、素材の野菜のことをよく知らなければと一生懸命研究をしたとすると、先生に叱られるわけです。ここは料理の学校なのだからそれはやりすぎだ、そこまでやったら学校の趣旨を逸脱することになると。つまり壁があるというか敷居があるわけです。それでは窮屈だと考えて、そういう専門学校ではない学校をプラトンという哲学者が作りました。

プラトンが作ったこの学校は、アカデメイアという名前でした。大学の学問のことをアカデミズムと言いますが、プラトンのこの学校からすべて学問が始まったのです。哲学、フィロソフィアとは、ソフィア“知恵”をフィレイン“求める”ということなのです。

自由にものを考えようとするプラトンに対し、自由を尊ぶ古代ギリシアの人たちは、そのことを高く評価して、敬意をもちました。そういう人たちがアカデメイアの学園に集まりました。哲学とは、いかなる制約もなく、自由に思索することを本分とする学問です。限定されることなく自由にものを考える、どこまでも果てしなく追求する、そういう人が哲学者なのです。

✚ 哲学の研究領域は、限定されざる全体

そういうわけで、哲学は研究すべき問題を考察する際、自らを限界づけません。法律学や植物学のように専門領域を限定せずに考えます。そういう意味で専門的な学問ではないのです。専門的な学問は狭い範囲をどんどん深く掘り下げていきますから、ますます難しくなりそうです。しかし、哲学は研究範囲も研究方法も限定せず自由に考えます。決して、難しいことはありません。

ということで、哲学の研究領域は“限定されざる全体”なのです。全体という無限に広い領域のどこに行ってもよく、自由に全体に関わりたいと考えるのです。そして、限りある人間の知性がそういう広い全体をどうやって把握するかという知的な大冒険をギリシア人は考えたのです。狭い領域すなわち路地裏も居心地がいいかなという感じがしますが、路地裏ではなく広い荒野に出て行こうとしたのです。

✦ 弁証法～立場を変え価値観を変えての対話

そういう哲学の方法論としてはいろいろな考え方がありますが、そのひとつが古代ギリシアの哲学者ヘラクレイトスが考えた方法で、後世の学者たちはその方法を“弁証法”と名付けました。弁証法の「弁」は、弁護士の弁、弁舌爽やかなの弁で、しゃべることです。「証」というのは、真理を明らかにすること。「法」は方法で考え方ということです。しゃべって真理を明らかにする考え方となります。しゃべるといっても独り言ではありません。弁証法はドイツ語でディアレクティーク、英語ではダイアレクティックで、二人の対話なのです。対話することで真理を明らかにする考え方です。

日本人同士で、私が「暑いですね」と言うと、相手の人も「本当に暑いですね」とうなずいてくれる。日本人のこういうところは私も好きですが、欧米の人は違います。私が「青木君ってとてもいい人だよな」とか言うと、「そうかな？ 青木君ってこういうことをする人なのに、君はそれをいっているの？」とうなずかないのです。そうすると私も、「そんなこと言うけど、彼のこういうところを認めてあげないとそれはちょっと違うのでは」とか言うわけです。「いい天気ですね」と言うと、「こんな天気が続いたら水不足になって、農家が困るよ」と。いいと言ったらよくない、よくないと言ったらいい。これが対話であって、うなずき合うのでは投げたボールを投げ返さないことになる。それではキャッチボールが成立しない。話が續かないではないか、そういうふうに欧米の人は考えるのです。

ということで、弁証法の弁は対話なのです。「ピラミッドは三角です」と言うと、「いや四角です」となります。ピラミッドは地上から見ると三角ですが、上空からヘリコプターで見ると四角です。つまり、立場を変えるとものは違って見えるわけです。青木君の例も、私の立場から見るといい人ですが、違う立場から見ると人間には色々な側面があるので違って見えるわけです。見方もあるし、価値観もあります。私の価値観ではいい人だけど、彼の価値観では全然いい人ではない。同じものを一面的ではなく、立場を変えたり価値観を変えたりして対話的に考える。すると、よりよくそのものが見えて来るだろうという考え方です。

✦ モーツァルトの音楽の弁証法

われわれは弁証法という言葉在日常会話ではあまり使いませんが、欧米の人、特に教養人といわれる人たちは結構日常的にこの言葉を使います。

例えばこういう例があります。ドイツ人のカール・バルトという人は音楽家ではなく、ただの音楽

「あなたの音楽の**弁証法**を耳にすると、私たちは若くもありうるし、老人でもありうる。働くこともできるし、休息することもできる。満ち足りることも、悲しむこともできる。つまり、一言でいえば、生きることができるのです。」(K・バルト「モーツァルトへの感謝の手紙」)

好きの素人ですが、天国に行ったモーツァルトへの感謝の手紙という形式で随筆を書いています。その一節です。モーツァルトの音楽はとても明るく楽しく満ち足りた感じがしますが、

が、同じ音楽の中に苦労人だったモーツァルトの悲しみもまた、感じられます。“死者のためのミサ

曲”というモーツァルト最晩年の傑作があります。死んだ人を追悼する曲なのでもちろん悲しい感じ
です。しかしよく聴くとなにか光が差しているのです。キリスト教の信仰者にとっては希望の光なの
かもしれません。若いことと老人であること、正反対です。働くことと休息すること、これも正反対
です。満ち足りる幸福感と悲しみ、正反対です。正反対のものがひとつのモーツァルトの音楽の中に
感じられる。そのことを、カール・バルトは「音楽の中に弁証法がある」と言うわけです。それはモ
ーツァルトの音楽が非常に優れた音楽だからそうなのです。そうではなく、非常に若々しく一生懸命
働くよう促すような、例えば軍隊の行進曲などは一面的です。軍隊の音楽は伝統的にそういうもので
すが。モーツァルトの音楽は、一面的ではなく正反対のものがひとつになっており、そこがモーツァ
ルトの音楽の優れたところだとこの人は言っているのです。

✦ ヘラクレイトスの言葉

・ ヘラクレイトス断片 8

「相反するものが一致するのであり、相違するものから最も美し
い調和 [Harmonia] が生まれる。」

弁証法というのは、
ある事柄において対
話的なあり方をして
いる両極を把握する
ことによって、全体
の真理を明らかにす

る思考法ということができます。人間の人生、生きるということは、対話的な現実を生きることでは
ないかと感覚的に思われていますが、そういうことをはっきりと最初に言ったのは、古代ギリシアの
哲学者ヘラクレイトスという人でした。この人にこういう言葉があります。モーツァルトの音楽は非
常に対話的ですが、美しい音楽、最も美しい調和と言えます。調和はギリシア語ではハルモニア、ハ
ーモニーという英語の元の言葉です。ハーモニーは現在では音の調和をしばしば表しますが、しかし
調和そのものも意味します。

こういうヘラクレ
イトスの言葉もあり
ます。ヘシオドスは
神統記という本の中
で、「ひとつの家は
昼と夜の両方を同時
に入れることはでき
ない。昼と夜は別々

・ ヘラクレイトス断片 57

「多数の教師となっているのはヘシオドスである。人びとはヘシ
オドスが一番の物知りであると思っている。しかし、その彼は昼と
夜とが何であるかも知らないような人物なのである。昼と夜とは、
実際には、一つなのである。」

のふたつのものだ」と言っています。ところがヘラクレイトスは、昼と夜は実際にはひとつなので
あると言っているのです。どちらが正しいのでしょうか？ 相反するものの例として昼と夜が挙げられ
ているわけですが、昼と夜とは果たして本当にひとつでしょうか。今、私たちが窓の外に見ている景
色は昼ですが、ブラジルの友人に電話して窓の外を見てもらえば真夜中だと言うでしょう。地球の今
こちら側は太陽の光が当たって昼ですが、地球の裏側のブラジルは光が当たっておらず夜なのです。
昼があれば夜がある、光があれば影がある、これはふたつでひとつではないか、そうヘラクレイトスは言
いたいわけです。

✦ ルネ・マグリット「光の帝国」の弁証法的芸術美

昼と夜との相反するものから最も美しい調和が生まれるとありますが、本当にそうでしょうか。弁
証法的な本質をもつ人間の営みは、哲学だけではありません。芸術もそうなのです。例えばこういう
のがあります。これは、ベルギー出身の画家で 20 世紀にパリで活躍したルネ・マグリットの絵画作
品「光の帝国」です。マグリットの代表作と言われており、評判の高い絵です。家の前に街灯が立っ



ていてその光が家の壁を照らし、二階の窓の明かりとともに家の前の池に映っています。つまりこれは夜の光景で黒い木が立っていますが、空には星も月もなく青空、昼の空です。マグリットは、夜の住宅の上には夜空があるはずなのに、夜空を昼の青空に置き換え、昼と夜をひとつの絵の中に描き込んだのです。これは要するに、ヘラクレイトスの言う昼と夜という相反するものを人々に気づかせ、不思議な感じを抱かせるわけです。芸術家は皆そういうことを考えており、芸術美とはそういう弁証法的なものなのです。

✦ パウル・クレー「造形思考」

ドイツで活躍した画家にパウル・クレーという人がいます。音楽も哲学も好きな人で、バウハウスという美術学校の先生をしていました。画家の卵たちに対し、芸術家は弁証法的な考え方をしなければならない、哲学者と芸術家は原稿用紙に字を書くのとキャンパスに絵を描く違い

はあるが、考えなければならないことは同じだと言っていました。この「造形思考」はバウハウスの講義録で、こういうことを画家の卵たちに語ったのです。

弁証法は対話的な仕方では真実を明らかにする考え方ですが、対話的とは一面的ではなく正反対の面も注目しなければならないということです。われわれは、例えば光と影というと光の方が好きです。人間は明るい方がいいのです。しかし、そうした好き嫌いを脱して、両者を共に捉えて、両者の緊張感に触れるならば、それはわれわれの興味を大いに惹くものであるに違いありません。哲学にせよ芸術にせよ、弁証法的思考は、自分の都合のいい方だけを見るという一面的な見方を戒めているのです。

クレーの言葉の最後のところに「二元論を二元論として取り扱ってはならない。二元論を、相互に

補い合う統一にもっていくことが肝要である」というのがありますが、二元論で一番有名なのは善悪二元論でしょう。「世の中は善なるものと悪なるもので出来ており、人間の心は善なる心と悪なる心

・ 「反対概念のない概念は考えられない。反対概念があるから、概念ははっきりする。反対概念のない概念は効果がない。

.....

概念はそれ自体としては存在しない。たいてい是一对の概念があるだけだ。たとえば「下」を想定しない「上」というものがあるだろうか？ また「右」がなければ何を一体「左」と呼ぶのだろうか？ 「前」のない「後ろ」とは何だろうか？

それゆえ、すべての概念は反対概念を想定している。

たとえば、命題 — 反対命題 のように。この間の — は長かったり短かったりして、対立度のいかに応ずるわけである。

対立するものの位置は固定したものではなく、両者の間は流動する運動だと言ってよい。固定しているものは、ただ一個の点、中心点だけであり、種々の概念は、そのなかにまどろんでいる。.....

二元論を二元論として取り扱ってはならない。二元論を、相互に補い合う統一にもっていくことが肝要である。.....」 (パウル・クレー『造形思考』(新潮社)上巻 57頁)

で出来ている」ということです。

✚ フョードル・ドストエフスキー「善なる心、どす黒い心」

ロシアの文学者ドストエフスキーは、人々に神のようだと崇拝されるロシア正教の経験豊富な司祭が、刑務所に収監されている手の付けられない極悪非道な犯罪者を改心させる話について、こう述べています。司祭は自身の極めて善なる心で犯罪者に相對したのではなく、自分の中の人並外れてどす黒い悪い心でもって語りかけ、犯罪者の心を少しずつ開いていって改心させた。もちろん司祭は自身のどす黒い心を放し飼いにしないで飼いならしてあり、その犯罪者に、彼の中にも善なる心があること、どす黒い心を飼いならせることに気付かせたのです。神ならぬ人間は皆、善なる心と悪い心の両方を併せもっている。悪事に走らないのは、悪い心を飼いならしているからなのです。どんなに悪い人間でも悪魔のような奴とか思っはいけないし、どんなにいい人でも神様のような人だと思っはいけないということなのです。私もそうだと思います。

✚ パブロ・ピカソの左目、右目

「私に興味があるのは『違ったものの寄せ集め』とでも呼ぶうるもの、私がそれについて何かを語りたと思う事物の間にまったく思ひもかけぬ関係を作り上げることである。それは、まさにそうした形の関係を作り上げるにはある種の難しさがあり、難しいがゆえに興味湧き、その興味には一種の緊張感があるからである。この緊張感こそ私にとっては、静かな均衡とか調和よりもはるかに重要なものであり、実は均衡とか調和は私にはまったく興味がないのである。(・・・)私は、精神を通常とは違う方向に向かわせ、目覚めさせたいのである。私は、作品を見る人が、私なくしては発見しえなかったであろうものを発見するのを手助けしたいのである。だからこそ私は、たとえば左目と右目の相違を強調するのである。画家は、両目を同じに描くべきではない。両目は、けっして同じではないからである。つまり私の意図は、事物を動かすこと、相矛盾する緊張、相反する力によってその動きを誘発すること、そしてその緊張関係もしくは対立関係の中に、私にとってもっとも興味ある一瞬を見出すことである。」

芸術家には弁証法的なことをよく心得ている人がたくさんいます。パブロ・ピカソは、20世紀で一番有名な画家とも言えましょう。彼はこんなことを言っています。相反するものを寄せ集めひとつにすることで、ある緊張感のある一瞬を作りたいというのです。マグリットの場合は置き換えという方法でしたが、ピカソにはピカソの方法があり、例えば左目と右目の相違を強調するのである。常識的には、左目と右目は左右対称同じものだと思いますが、そうではないということです。眼は心の窓などと言います。人間の目はうれしいときにはうれしい目、悲しいときには悲しい目と、人間の気持ちを表現します。

みなさんご存じのことと思いますが、ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサというインドで活躍した女性がいます。この人は、たいへん、優しい人でした。誰に対しても優しい人でした。周りのスタッフだけではなく、助けを求めてくる人誰に対しても本当に優しいのです。

が、ただひとりの人に対しては非常に厳しかった。実は、自分自身に対してはとてつもなく厳しかったのです。優しさと厳しさとは一致しています。

彼女のもとに、貧しく病んでもいる人が助けを求めて来ることがあります。風呂に入れずものすごく汗臭かったりするわけです。そういうときでもマザー・テレサはにっこり笑って迎え入れます。その笑顔はもちろん演技です、大変な演技です。彼女の死後しばらくして、アメリカの友人が「マザー・テレサからの手紙」というのを公表しました。私はマザー・テレサのことを本当に強い人だと思っていたのですが、そこに書かれていたのは泣き言の連続です。辛くて耐えられない、もう私はやっはいけないということを、アメリカの遠く離れた友人だけに語っているのです。これが人間の真実だと思います。いつも誰に対してもニコニコ笑顔で優しい人、それをやっはっていくことの辛さ、その弱

さを語っているのです。人間は強いけれども弱い、これが人間の真実だなど、マザー・テレサのことをますます偉いと思いました。

ピカソがマザー・テレサを描くとしたら、片方の目はとても優しいけれど、もう片方の目はものすごく厳しい目にするでしょう。厳しさをしには優しくしてられないということです。

レオナルド・ダ・ヴィンチ「モナ・リザ」

「モナ・リザの微笑のうちには、二つの相異なる要素が一つになっているらしい、という予感が、幾人かの研究者の注意を引いてきた。そこで彼らは、この美しいフィレンツェ女性の表情の中に、女性の愛情生活を支配している矛盾、つまり内気と誘惑との、きわめて献身的な優しさと、向こうみずに要求し、男性をまるで何か未知のもののように喰らい尽くす官能性との、あの矛盾対立の完璧な表現を見ようとする。」

「善と悪、残忍と慈悲、慎みと猫かぶりとをもって、彼女モナ・リザは微笑んでいた」(アンジェロ・コンティ)。(S・フロイト「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年時代のある思い出」)



世界の名画と言われるレオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザです。この絵のどこにそんなに魅力があるのか。昔から、このモナ・リザの微笑み、謎の微笑みについて、いろいろな人がいろいろなことを言って来ました。20世紀の初頭に無意識について研究し精神分析という学問を築き上げたフロイトが、このモナ・リザの微笑みの謎に挑戦しています。モナ・リザの絵は、ルーブル美術館の一番いい部屋の壁にひとつだけ飾ってあります。そうすると世界の名画に違いない、世界の名画なら描かれているモナ・リザは聖母マリアのようないい人に違いないと皆思うわけです。それはちょっと違うとフロイトは言います。モナ・リザは表面は慈悲深い聖母マリアのようだが、実は男を誘惑して利用価値がなくなればポイと捨てる、残忍な悪女の隠し味が効いているところがこの名画の秘密だと言うのです。アンジェロ・コンティの引用のように、「慎みと猫かぶりとをもって、彼女モナ・リザは微笑んでいた」のです。フロイトのすごいところは、猫かぶりは演技なのですが、彼女は自分が演技をしていることを意識の面では気付いていないとしているところです。本人は常に自分は善なる女性だと思っているけれども、彼女の無意識は悪女なのです。意識と無意識はふたつでひとつですが、正反対のことをやっているわけなのです。フロイトは、モナ・リザに秘密の隠し味を効かせたレオナルド・ダ・ヴィンチを高く評価しています。

同じく 20 世紀初頭の芸術家マルセル・デュシャンは、モナ・リザの絵葉書に落書きをしました。鼻の下と顎にちょっとヒゲを描き加えたのです。どう見えるでしょうか? ……オヤジ顔です。完全にオヤジの顔になってしまうのです。レオナルド・ダ・ヴィンチと同時代、ルネサンスの画家でラファエロという人がおり、彼も美しい女性をよく描きました。しかし、ラファエロが描いた女性の顔にヒゲを加えても、女の人の顔になにか汚れが付いているという感



じでオヤジには見えません。レオナルド・ダ・ヴィンチは死ぬまでこの絵に手を入れ続け、死後アトリエに残されていた何枚かの絵の中の一つがこれなのです。同じく最晩年まで手を入れていた絵が、洗礼者ヨハネという肖像画です。ヨハネは聖書の中では男の中の男という描かれ方をしていますが、レオナルドのヨハネを見ていると、次第に、あれこれオバサンじゃないか、と見えて来ます。そういうふうを描いているのです。レオナルドという人は、男性の中に女性がいる、女性の中に男性がいるというふうに見ていたらしいのです。女の子は、少女時代に母親をお手本にしてだんだん女性らしくなっていきます。しかし、彼女の近くには母親だけでなく父親もいて、父親は女の子に何の影響も与えないかという、そうではありません。つまり、意識的には女の子は母親をお手本にして大人の女性になっていきますが、近くにいる男性つまり父親からも影響を受けるのです。ただ、その影響は無意識に蓄積されていき、意識の女性的なものを支えているわけです。

✚ カール・グスタフ・ユング「アニムス、アニマ説」

フロイトと同じく精神分析という学問に貢献したカール・グスタフ・ユングは、「アニムス、アニマ説」というのを唱えています。アニマとは女性の精神で、女性は自分のことを女性だと思いますが、無意識には男性がいてそれがアニムスなのです。アニムスの由来は父親で、父親からの男性の精神であるアニムスが女性の精神を支えているのです。反対に男の子の場合は、父親とキャッチボールをしたりして男らしさを父親から学びます。しかし母親がいて、その母親から学んだものは無意識にどんどん蓄積され、男性的なものを支えていきます。ユングは、臨床家として患者たちを診ることをつうじてこのことに気付きました。

こういうことがありました。ユングのところに、部下が 100~150 人もいる 40 歳代の軍人が診察を受けに来ました。その人はユングにこう言いました。「私はとても恥ずかしい病気に今苦しんでいます。私は女装症という恥ずかしい病気になってしまいました。女の人の服をどうしても着たくなり、夜、人が寝静まってから女の人の服を着るとすごく気持ちがよくて止められないのです。なんとか治してください」。ユングは、「あなたは軍人だし、それはお困りでしょう。手近にそういうものを置いておくのがよくないので、手近にある女の人の服を全部片付けてしましましょう。来週また来てください」と言いました。翌週来た軍人の顔色は悪く、「どうしました？ 女の人の服全部片付けましたか？」と聞いても生返事。「片付けていませんね。手近にそういうものがあるのが良くないので。全部片付けて下さい。ではまた来週」。次の週になってもその軍人は来ず、しばらくしてその人は軍隊を辞めざるを得なくなり、正常な意識を失い廃人になってしまったそうです。ユングは、自分が大失敗をしたことに気づきました。女装症に悩むあの人に自分はどうも正反対のことを言ってしまったようだ。彼は多くの部下をもつ軍人で、男の中の男という振る舞いをしなければならぬと思い、あまりにも強くそのことを思って、自分の中の女性的なるものを押し殺して無くそうとした。無くなるわけにはいかない彼の中の女性的なものが苦しくて耐えられず、深夜に誰の視線もないところで女装症という仕方で現れたのだ。それを彼と一緒に押さえつけるのは正反対で、彼に対し心の中にある女性的なものを認めてあげなさい、立場をもたせてあげなさいと言うべきだった。男性の中にある女性、女性の中にある男性をしっかり認め、その立場をちゃんとしてあげるのが精神の健康のためには大切なのだと彼は学んだのです。

私は長いこと教員をやっています。学生の顔を見て親の顔が見たいという言葉がありますが、最近親の顔が見えてきました。男の子の顔を見ると母親の顔が、女の子を見ると父親の顔が見えます。実際、そういうふうに見て人間の精神は出来ています。皆さんも自分の中に異性がいると感じませんか？ 過去を振り返ると意識においては一瞬の出来事のようなものでしかないかもしれませんが、男性であれば母親から引き継いだもの、母親的な精神が発露していたな、と思うことはありませんか？

恋愛をしているときは複雑です。お互いの男性性と女性性が複雑に反応し絡み合います。皆さんも、そういう無意識の中にある異性を感じたのではないのでしょうか。

このように、人間を見ると、男だからとか女だからとか、男だから男らしくとか女だから女らし

くとか、そういう一面的なことばかり思っではいけないとユングは述べています。レオナルド・ダ・ヴィンチは本当にそういう見方をしています。男の中の女、女の中の男を本当に見ているのです。人間に対するそういう一面的ではない見方は大切だと思います。

✦ 人間存在における〈生と死〉の一致

人間について、男性性とか女性性、善悪ということをお話してきましたが、もっと決定的なのは生と死です。これも弁証法的に一致します。つまり、生きているということは死すべきものとして生きているということです。われわれは生の方ばかりをいいものとして考えますが、われわれは必ず死にます。いつか死ぬというだけではなく、その気になれば今すぐにでも死にます。今この時私は生きているけれども、死ぬる私として今いるわけです。生と死という両面あるのが人間、常にそうなのです。20歳くらいの学生は元気いっぱい、自分が死ぬとは全然思っていません。他人は死ぬけれども、自分が死ぬとは思っていません。そういうのは全く弁証法的ではなく知恵がないとなりますが、皆さんはそういうことはないと思います。生と死はやはり相反するものですが、ひとつです。光と影のように。自分に都合のいい方だけを見て自分は死なないと思うのは愚かなことで、生と死という相反するものの一一致がわれわれの存在そのものと見るべきだと思います。

✦ 存在と無

最初にお話したように、哲学は限定されない全体が研究領域ですが、何の全体かという、何かの全体であれば、その何かという一部分の全体になってしまいます。本当の全体とは、時間的、空間的、あらゆる意味で限定されないもので、それが哲学の研究領域ということになるわけです。それはありとあらゆるものの在ること、つまり存在とそれのないこと、つまり無との一致ということになります。

現実のことを例に、相反するもの

が一致しているということをお話し、自分に都合のいい一面だけ見るのはダメだと言いました。これが哲学的な戒めとしては肝心なことです。哲学がどこまでも突き進んで行くところまで行くかということ、これ以上先には進めない全体、存在と無、それらが一致している全体です。芸術ではなかなかここまでは行きませんが、ある種の芸術は無ということをお考えください。その無の中に存在が現れ、その無を思う人間が現れてきて、それが非常に重要な芸術になったりすることがあります。存在と無のことを考えるのは必ずしも哲学だけとは言えません。

・ 既述のように哲学は限定されざる〈全体〉が研究領域であった。だが、何の全体か？ 何かの全体であれば、それは〈何か〉という一部分の全体であるにすぎず、実は、全体ではない。時間的、空間的、あらゆる意味で限定されない全体こそが哲学の研究領域である。

・ では、いかなる部分でもない全体そのものとは何か？ それはありとあらゆるものの在ること、存在とそれのないこと、無とであろう、つまり〈存在と無〉とが一致している全体であろう。哲学は哲学である限り、存在論であり、無を考えることになるのであった。

✦ 自分に都合の悪い方にも頑張って目を向けましょう

芸術のことを例に話してきましたが、事柄を一面的に見るのでは真実を見ることにはならず危ういのです。自分に都合の悪い方にも頑張って目を向けましょうというのが、弁証法という考えの一番言いたいところですね。さまざまな例を挙げて、善と悪とか女性と男性とか特に人間のことについて話してきました。相反するものが実は一致しているのであり、死なんて縁起でもないから勘弁してくれと言いたいところですが、やはり人間の真実はそれを承知しなければということでもあります。そうい

うことを戒めというか注意点としているのが弁証法という考え方で、哲学の重要なポイントのひとつということです。

【質疑応答】

Q 哲学と宗教、特に仏教との関係を教えていただきたい。そのことが東洋と西洋の哲学の違いにも通じるのかなと思います。

A 東洋の仏教は多分に哲学的です。釈迦が言っているのは、自分はこういう苦しい思いをしてこういうふうにしてその苦しみを克服したということで、神や仏や私を信じてくれとは全然言っていません。釈迦の教えと哲学は非常に近いのですが、その後の大乘仏教での南無阿彌陀仏を唱えることで救われるとかいうのはちょっと違ったものだと思います。ただ、南無阿彌陀仏を唱えつつもそれでいいのかと考える親鸞は思想家なのです。自分の信仰について哲学しているという感じがあります。道元という大変立派な宗教家には著作がたくさんありますが、皆さん座禅をしましょうと言っているわけではなく、座禅するとはどういうことなのかを突き詰めて考えているのです。そういうところは全く哲学的です。

西洋でもキリスト教の神学者で、自分の信仰心について哲学的に思索している例はありますが、近代哲学は、信仰心ではなく理性でどこまで行けるかということをやってきました。19世紀後半ニーチェは神は死んだと言い、神が信じられない時代という自覚の下に思索するのが現在に至るまで哲学の主流になっています。宗教に対して無関心という感じです。

ただ私自身は、宗教的なことに関心を持っています。今、遠藤周作というカトリック作家の最晩年の思索に関する論文を用意しています。遠藤氏は、最終的には、「宗教多元主義」を高く評価するようになります。キリスト教も、仏教も、イスラム教も、ヒンズー教も、みな、同じ神的存在に由来しているという考えです。キリスト教とか仏教とかヒンズー教とか特定の宗教が正しいのではありません。これからの神無き時代にも人々が人間を超えた何かを思うことが必要ではないかというのが遠藤周作の問いかけなのですが、私は非常に共感しています。

Q 「対立するものの位置は固定していない」というパウル・クレーの言葉ですが、実生活の中で概念を自由に動かすと、どうもあの人は信用できないと見られるような気がするのですが。

A 今までやってきたことが違ってたと分かり、変えた方がいいと思ったときには変えるべきではないでしょうか。弁証法的な思考は、事柄とともに動くことが必須であると考えます。事態が変わっているのに、それを認めずに動かないのは不誠実だと考えます。誠実であれば他人は分かってくれるだろうと思います。哲学者は学問的誠実さが求められますが、実生活でも同様だろうと思います。

政治家はそうはいかないかもしれませんが、私は、誤ったことに気づいたら、ただちに意見を変える人を評価したいと思います。

Q 第二次世界大戦やナチスの問題がドイツ人の精神にどのような影響を及ぼしているのか、ハイデッガーの位置付けなども含め教えてください。

A 第二次世界大戦でヨーロッパに大混乱を引き起こし、ホロコーストで多くのユダヤ人を殺したドイツは、最近まで非常に傷ついていたと思います。

ハイデッガーはナチス政権時代にフライブルク大学の総長としてナチスの文教政策を肯定しその知恵袋になろうとしました。戦後その戦争責任を問われ大学を辞めざるを得なくなりましたが、優れた哲学者で戦後の思想界に非常に大きな影響を与えた「存在と時間」という大著を著わしました。しかし、最近、ハイデッガーを研究してドイツの大学教授になった人は多分ひとりもいないと思います。ドイツでは全く評価が低く、やってはいけない研究テーマという感じです。最終的に法的には戦争責任を問われませんでした。ハイデッガーがナチスに反対しなかったという事実は残っています。ナチスに反対した人は少数で、反対しなかった人は思想家として学者としての責任を問われ続け、いま

だに傷ついています。

第二次世界大戦は、ドイツ人にとって昔のことではなく未だに尾を引いている切実な問題です。

Q 現代社会には例えば戦争とか経済格差という問題がありますが、現代の哲学者はどのような研究をしているのでしょうか。

A 私は戦争については関心があり、大いに心配し心を痛めています。(戦死したウクライナ兵のお別れ式の映像を紹介しつつ) これは、教会での葬式の前に昼間広場で行われた、戦場で死んだウクライナ兵士のお別れ式です。私の友人の知人です。ウクライナで起こっていることについての私の関心は、政治とか軍事のことではありません。人間の事柄として、非常事態の国家の中での人々の思いということを考えています。われわれの心持ちとは全然違います。去年ウクライナの人と SNS で話をした際、私は自分のことを少し遠慮して「平和ボケの日本人だから」と言ったら、相手の人は、即座に「そうだね。平和ボケだね」と言いました。確かに日本人全部平和ボケなのです。哲学者として私は、私と非常に違う意識を持っているウクライナの人と付き合っても勉強になるというか、私という人間の、一言でいうと、平和ボケ加減を気付かされています。今週の月曜日にキーウの小児病院が攻撃され瓦れきの山になりました。そのニュースをウクライナの友人が泣きながら知らせてきました。私は彼らのそういう意識を共有したいと思っています。

関口 浩 (せきぐち ひろし) 先生のプロフィール

(略 歴)

1958 年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。
現在、公益財団法人日独文化研究所研究員、早稲田大学法学部非常勤講師。
実存思想協会理事。日本語版ハイデッガー全集編集委員。
専門は、哲学、美学、日本思想。

(主な著作)

『西洋哲学の 10 冊』(岩波ジュニア新書 613) 共著
『ハイデッガー「哲学への寄与」解説』(平凡社) 共著
『ハイデッガー読本』(法政大学出版局) 共著 ほか
訳書として、
M・ハイデッガー『技術への問い』(平凡社ライブラリー)
M・ハイデッガー『芸術作品の根源』(平凡社ライブラリー)
ジェイムズ・ロード『ジャコメッティの肖像』(みすず書房) ほか